

P B L 事例シナリオ教育の可能性と課題

企 画 者：山田康彦（三重大学教育学部）
 話題提供者：森脇健夫（三重大学大学院教育学研究科）
 話題提供者：角谷道生（三重大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻、
 三重県立いなべ総合学園高等学校）
 指定討論者：一柳智紀（新潟大学大学院教育学研究科）
 指定討論者：渡辺貴裕（東京学芸大学大学院教育学研究科）
 司 会 者：根津知佳子（日本女子大学家政学部）

三重大学教育学部を中心に10年以上前から教員養成型PBL教育の開発が進められてきた。近年は現場体験型のみならず、特に対話という観点を中心に据えた事例シナリオ型の重要性も注目され、その理論と方法、評価方法がまとめられてきた。本セッションでは、このPBL対話的事例シナリオ教育について、多角的な視点から検証し、その可能性と課題を明らかにする。

具体的には、1)PBL事例シナリオ教育の全体的な到達点と課題、さらに2)その汎用的展開としての高校教育での実践結果についての2つの報告をふまえて、対話論や教師教育論の視点からコメントをいただき、全体で検討していきたい。

上記の報告の要旨は以下の通りである。

1. 事例シナリオを用いた教員養成型PBL教育の到達点と課題（森脇健夫）

標記の探求は、医学教育の事例シナリオ教育を範としながら、教員養成教育の領域固有性に基づいたPBL教育をどのように構築していくか、また教員養成教育領域における理論と実践の往還に事例シナリオ教育をどのように位置づけるかという問題意識のもとに重ねられてきた。

現在の私たちの探求の到達点としては、①事例シナリオ教育の目標（学習者の「観」の自覚と変容）を明確にしたこと、②事例シナリオの構成原理の提起と具体的な方法の構築、教員養成各分野における授業の開発、③事例シナリオ教育の評価方法の開発と評価である（参照：山田他『PBL事例シナリオ教育で教師を育てる』三恵社、2018年）。

課題としては、①カリキュラム論的事例シナリオ教育の位置づけ、②評価方法のさらなる探求、③事例シナリオ教育のより幅の広い分野・内容への応用可能性の探求が挙げられる。

2. PBL事例シナリオ教育の高校教育での展開の内容・成果・可能性（角谷道生）

（内容）

高等学校福祉科の授業において、介護施設等の日常でよくある出来事を、事例シナリオとして7つ作成し、「福祉における課題を発見し、創造的に解決できる」力を育むことを目標に実施した。

（成果）

生徒は他者（教師・生徒・専門職）との対話を通し、自らの考えを広げ、深める姿が見られた。特に、一つの物事に対し、多面的に見たり、物事を構成している共通点を見出したり、目の前の物事とは異なる別のものをつなげて考えるなど「するどい気づき」が授業回数を重ねるごとにみられるようになった。

（可能性）

校種・教科を超えて「学び方」を育む。

生徒は、他者との対話を通し、自らの視野の狭さや思考の固定化に気づき、「自分もそういう考えができるようになりたい。」「もっと柔軟で多面的な見方を身につけたい。」などの身近でリアリティのある「あこがれ」を創造し、その実現のために必要な福祉の知識や技能等に自ら気づき、より深く学ぼうとする姿がみられた。こうした一連の「学びのサイクル・学び方」を育むことがPBL事例シナリオではできるのではないかと。

今日高等教育から初等・中等教育に至るまで、能動的な学習の必要性が指摘されている。その中で、それを進める一つの方策としてPBL教育が注目されている。しかしその取組の実践的・理論的な検証や深化はこれからである。本セッションが教員養成のみならずPBL教育全体の実践と理論を深化させる契機ともなることを期待したい。